



浅井三代

応仁の乱が、どうやらおさまった室町末期に、江北六郡を支配する京極家をわが掌中におさめ、意のままに動かしてみたいと、野心をいっていた男がいました。浅井郡丁野村に住む浅井亮政という郷士でした。

この亮政は、分家筋の直種の次男として生まれましたが、本家の浅井直政の婿養子となり、浅井一族の総領におさまっていました。

亮政の先祖は、公卿の三条公綱の落胤だという説と、皇族の物部守屋の子孫だという説がありますが、これは信じられません。いま明らかになっておりますのは、浅井氏は、浅井郡司などをやった浅井郡丁野村の一土豪で、鎌倉時代の末ごろに、京極家の被官（家臣に準ずる者）に加えられたということだけです。平素は、農事にたずさわっていて、戦いがあれば、それに参加するという立場の家柄でした。

大永元年(1521)7月のことでした。京極家の執権（領主の補佐）として羽ぶりをきかしていた上坂家信が死にました。跡を継いだ信光は、父家信とは正反対のおろかしい男で、人望もない執権でした。亮政は、この信光にとって代わろうと考えたのです。

たまたま、主家の京極高延の子高延と、高慶の兄弟が跡継ぎ問題で争い、信光が庶子の高慶を推しているのにつけこみ、亮政は、嫡子高延擁立をととなえ、郷士仲間と図って尾上城主浅井貞則を旗頭として、反旗をひるがえしました。そして、安養寺城、今浜城を攻めて、信光を京極本拠の上平寺城へ追いこみました。さらに、江南の六角定頼に味方を頼んだうえで、上平寺館と刈安尾城を攻め、主君高延・高慶父子を、信光ともども尾張へ追放

してしまつたのです。残されていた高延を救出した亮政は、彼を尾上城に入れ、領主とおぎました。そののち、亮政は小谷城を築き、尾張に亡命していた高延と高慶を城に招き、高延から説得させて、高延を尾上城から小谷城へ移しました。この行為は、亮政が京極家をのっとりしたことだとして、佐々木本家の六角定頼は、大軍をひきいて小谷城を攻めました。困った亮政は、越前の朝倉教景に救いを求め、教景の調停役となった講和も失敗。さらに、反亮政派の家臣たちが、定頼に降参しましたので、折角の朝倉7,000の救援軍も効果がなく、亮政は小谷城を捨て、高極高延父子を連れ、美濃へ亡命しました。しかし、間もなく帰国した亮政は、たびたび六角家と戦いながらも、次第に江北の地固めをして、勢力をのばしていました。そして天文3年(1534)には、京極家の執権として、江北一帯に号令をくだす身になっていたことは、その年の8月20日、高延・高慶父子を、小谷城のふもとの清水谷館に迎えて、ぜいたくなもてなしをし、おびただしい進物を贈り、15組におよぶ能楽を上演してみせていることでも、よくわかるのです。

京極家の実力者であった多賀貞隆は、亮政が、京極の治政をわがもの顔に取りしきっているのを怒り、六角定頼に頼って反抗しましたが、亮政は本願寺と手を結んで、これに対抗しました。天文7年、京極高延は71歳で死に、亮政に保護される高延が京極家を継ぎましたが、弟の高慶はこれを不満として、六角定頼にたのんで決起し、鎌刃城、佐和山城などで血戦を交えましたが、亮政に打撃を与えるまでにはいたりませんでした。

天文10年4月、こんどは高広（改名した高延）が亮政の専横を怒り、兵をあげました。あるときは高広を、あるときは高慶を推すというように、ご都合次第でネコの眼のように態度を変えて、自分の勢力拡張に利用した、亮政のやり方に、高広たちは、辛抱ができない気持ちになっていたのです。ところが、間もなく亮政が死に、浅井氏の家督は、和歌や能楽ばかり愛して、弱肉強食の戦国時代に生まれながら、戦うことを好まぬ久政が継いだのです。高広は、これこそ絶好の機会とばかりに、まずは上坂定信と手を結び、坂田郡の攻略から開始し、国友の砦を落し長沢城を攻めました。これに対し、久政は六角定頼と手を組んで、高広軍をけんせいしました。しかし、高広はひるむことなく戦い、ついに東浅井郡に兵を入れました。戦いを好まぬ久政は、高広に講和の手をさしのべました。

こんどは、高広と六角定頼の子義賢が、戦う番となりました。高広は、初めは勢いにのり佐和山城をとり、太尾城を攻略しました。だが義賢は、みずから兵をひきいて地頭山に戦い、高広・久政連合軍を撃ち破りました。すると、久政は、あっさりカブトを脱いで、六角義賢の軍門に降ってしまいました。

このように、高広・高慶兄弟の対立に、六角と浅井の対立がからみ、あるいは講和し、あるいは離合するという、複雑きわまりない様相のなかに、江北の地はこぜりあいがつづき、戦火は絶える間もなく、京極家は転落の一途をたどり、信長が、足利義昭を奉じて上洛するため、その道筋にあたる、観音寺城主六角義賢・義弼父子に、通行の承認を求めて近江に入ったときは、京極高吉（改名した高慶）が、柏原の京極家菩提寺徳源院（清滝寺）の近くに、わびしく暮らしているという有様でした。

天文22年(1553)4月、気の弱い久政は、嫡男の猿夜叉に六角義賢の一字をもらって賢政と名づけ、六角の重臣平井定武の娘をその妻にめとりました。「一字書き出し」をもらって、賢の字のついた名前を名のことは、浅

井が六角に臣従することを意味しておりました。浅井家の家臣たちは、久政の弱腰に不満たらたらでした。ところが、永禄2年(1559)、賢政が元服をしたとき、それまで一緒に暮らしていた妻の登代を実家に返し、六角に屈服することをいさぎよしとしないことを表明したのです。

この賢政が、父久政を隠居させて、浅井家三代目の当主になりましたのは、永禄3年のことで、弱冠16歳のときでありました。その相続を決定づけさせたのは、野良田合戦での勝利でした。この合戦は、六角義賢が、浅井の支城佐和山城に賞金をかけて、落城させようとしたことに端を発し、これを機会に京極家を再興したいとする高吉と、六角義賢が手を組んで浅井攻めをはじめました。

永禄3年8月、京極・六角連合軍は、六角を裏切って浅井に味方した肥田城（稲枝）を攻めました。六角方25,000、浅井方11,000が、現在の野良田町（稲枝）で激突し、浅井方が奮戦の末、大勝利となりましたので、老臣たちが相談して、当主久政を隠居させ、賢政に家督をゆずるようにすすめ、小谷城で戦勝祝いをしているときに久政からこれを発表させました。

浅井三代目当主となった賢政は、永禄4年(1561)6月、尾張領主の織田信長の妹お市を嫁に迎え、信長の一字をもらって長政と改名しました。これは、長政が六角家との縁をたち、信長と攻守同盟をしたという証拠でもありました。しかし長政は、この同盟が美濃平定のための同盟であることは知っておりましたが、亮政、久政、そして自分の三代にわたり厄介になった越前の朝倉家を攻めることになろうとは、とても知るよしがありませんでした。

計画どおりに美濃を侵略しました信長は、斎藤氏の稲葉山を岐阜と改めて、信長はそこを居城として上洛の機会をねらっておりました。そうしたおり、越前に亡命していた、十三代将軍足利義輝の弟義昭に目をつけました。義昭は、従兄弟にあたる義栄を十四代将軍の

座からひきずりおとし、十五代将軍になりたいと考えていましたから、信長の上洛したいという希望が一致して、ただちに実現に向けて行動しました。

信長は時を移さず、上洛途中の六角承禎（義賢が入道して改名）と義弼父子に、通行の承認を求め、あわせて義昭を将軍にするための協力を求めましたが、これを拒否された信長は、永禄11年9月11日、尾張、美濃、伊勢三か国60,000の大軍をひきいて、愛知川付近に陣営をすえ、12日には六角の支城箕作城をおとし、付近の支城からの降服を受け、13日に総攻撃を計画していました。しかし、観音寺城では、12日の深夜、六角承禎父子が、観音寺城に火を放って、甲賀へ落ちのびてしまいました。

佐々木一族の本家として、ときには近江一国を、のちに京極家と分けて江南を支配していました六角家も、信長という新興勢力に、わずか2日間で、その本拠の観音寺を落とされてしまったのです。もちろん、長政も3,000の兵をひきいて六角攻めに参加していました。このように短期間で六角家が滅亡した背景には、家臣間の団結がゆるんでいたこともありますが、信長に対して、機を見るに敏な江州人が、いち早く同調したと考えられなくもありません。

近江路を手中におさめた信長は、京都に攻めのぼり、十四代将軍足利義栄を四国へ追放し、義昭を十五代将軍にすえました。しかし、義昭は何事も信長の指示を受けなければ行なえないような、実権のともなわない立場を不満とし、越前の朝倉義景を頼って信長を討とうとしました。これを知った信長は、浅井家との約束を破って、長政にも相談をしないで越前を攻めました。信長来襲を知った義景は、皮肉にも、信長とは義兄弟の関係にある長政に、救援を求めてきたのでした。

長政は、祖父亮政以来うけた朝倉家に対する恩義と、お市の方の実兄信長に対する義理にはさまれて苦しみました。また一方では、信長の行動に疑惑をいだきはじめ、浅井家が

安全だという、なんの保障もないことを気づき、六角と結んで、信長を背後から攻めました。この長政の裏切りを怒り、信長は、浅井滅亡を決意したのです。もし、このとき長政が、信長を敵にまわさなければ、浅井家は、もっと寿命がのびていたかもしれないのです。

信長が、かならず攻めてくると考えた長政は、近江と美濃との国境にある長比砦や苅安尾城に、兵をふやし城壁などの整備をしていたのですが、長比砦守将の堀秀村が信長の説得に応じて、元亀元年(1570)6月19日、織田氏25,000の大軍を、やすやすと近江へ侵入させるはめになったのです。態勢が不十分であった浅井軍は、国境での防戦ができなかったばかりでなく、その2日後の21日には、小谷城下全域にわたって、戦火におおわれる緊迫した状態におちいりました。このとき、長政は朝倉孫三郎のひきいる8,000の兵とともに、大寄山に布陣しておりました。一方、信長は同盟していた徳川家康とともに、竜ヶ鼻に陣をすえていました。そして、6月28日の早朝、野村と三田村に出ばっていった浅井・朝倉勢と、織田・徳川勢の合計55,000余の兵が、姉川をはさんで激突しました。はじめのうちは、浅井方が優位に立っていたのですが、織田軍の35,000余が、浅井勢の側面、あるいは背後にのびて、網をせばめるように包囲して、ついに、午後2時ごろには、浅井方の大敗で姉川の合戦は決着したのです。その日の戦況を、信長が細川藤孝に宛てた書面から引用しますと『野村という所で、朝倉勢15,000ばかり、浅井勢5、6,000であろうか、同時に当方からも討って出て合戦となった。そして大勝利を得た。浅井方の首級は数えられず、野も田畑も、死骸ばかりだった。誠に天下のために慶ばしいことだ。浅井の小谷城も攻めほろぼすところだが、山がけわしく、ひとまず、これを包囲している。落城も時間の問題だ。一』という風に書かれていて、この合戦がいかに激戦であったかも分りますし、また、小谷城を包囲して孤立させる戦法をとっていたことも推察できるわけです。

長政は、姉川の合戦では大敗しましたが、本拠の小谷城に立てこもり、必死にこれを守っておりました。支城の横山城は羽柴（のちの豊臣）秀吉に攻め入れ、越前への道もふさがれましたので、信長の戦法どおり、長政は完全に孤立してしまっただけです。しかし、信長が小谷山を包囲している間に、畿内において、三好三人衆の三好長縁・政康、岩成友通らを中心として、信長打倒の兵をあげたのです。そこで、信長がこれを鎮圧しようと上洛した隙に、長政は、本願寺を中核とする湖北一向一揆と手を組み、朝倉勢とともに比叡山に集結して、三好三人衆と連絡をとろうとしました。このまま戦えば、信長の不利になるのですが、彼はいち早く將軍義昭を通じて、浅井長政と朝倉義景に講和を申し入れ、信長に有利な条件で、12月13日講和が成立しました。

そして、元龜3年(1572)1月2日、信長は、反信長派の浅井、朝倉、湖北一向一揆、それに本願寺などが互いに連絡がとれないように、姉川の封鎖をしました。そのうえで横山城に秀吉をおき、小谷城攻撃の機会をねらっていたのです。その間、長政のふがいなさを見かぎって、佐和山城主の磯野員昌、山本城主の阿閉貞征、尾上城主の浅見対馬守などが、次から次へと信長にくんだり、天正元年(1573)の8月初旬には、小谷城はまったくの孤立状態になっておりました。

これを好機とみた信長は、虎御前山に陣営をすえて、浅井総攻撃を開始しました。まず信長は、小谷城へ使者を送り、もし小谷城を明け渡せば、命は助けるし、大和に一國を与えてもよい、と説得したのですが、長政はこれを拒みました。信長を信じられない長政は、あとは決戦の末、死を選ぶしか方法が残っていないと覚悟しておりました。そして、8月20日に丁野城を攻められた朝倉義景は、越前に逃げ帰り、山田庄において自殺しました。さらに27日、長政の父久政は、小谷城の小丸で、浅井福寿庵と森本鶴松太夫とともに、好きな舞いをまったあと自殺しました。長政は、

これらの報せをうけると、お市の方を呼びよせ、信長のもとへ戻って、命ながらえてくれと頼みました。お市の方は、お供をさせてほしいというのですが、長政は、しかし茶々、お初、小督の娘と一緒に殺すのは可哀想だ。ぜひ、娘たちとともに生きのびてわしの菩提を弔ってくれと説得し、お市の方と三姉妹を信長の陣へ送りどけ、嫡子の万福丸を越前の敦賀へ逃し、生後まもない幾丸は、坂田郡の福田寺に預けました。このように、妻子の処置をしておいてから、長政は、500ほどの手勢をもって、本丸を攻めたる柴田勝家や羽柴秀吉に必死の抵抗を試みましたが、ついに力つきて、十数名の家臣をつれて、近くの赤尾屋敷にとじこもり、彼らとともに切腹して果てました。このとき、久政は49歳になっておりましたが、長政は、まだまだ働きざかりの29歳でした。

これで、三代55年も続いた浅井氏は、滅亡してしまいましたが、けっして、血族までとだえたものではありません。万福丸は、信長に捕えられ関ヶ原で殺されましたが、幾丸は、僧の慶安として生き残りました。清洲に預けられていたお市の方と三姉妹は、北庄城主柴田勝家と再婚し、本能寺で信長が死んだのち、北庄城が秀吉に攻められたとき、お市の方は、勝家とともに自殺して果てましたが、三姉妹は、お市の方の希望で秀吉に託されました。そして彼女らは、小谷山実宰院と呼ばれる、長政の姉のところで保護されていたとか、大坂城で育てられていたという説もあるのですが、いずれにしても、秀吉の支配下におかれて、秀吉の命令により、長女の茶々は、秀吉の側室淀殿となり、秀頼を産みました。次女のお初は、大津城主京極高次の正妻となりました。そして三女の小督は、徳川二代將軍秀忠の御台所となり、三代將軍家光を産み、末娘の和子は、後水尾天皇の皇后東福門院となり、明正天皇を産んでおります。

このように、浅井の血は徳川家や皇室において、脈々と引き継がれていったのです。

(徳永真一郎氏提供)